



素材を組み合わせて、作品づくりに集中しています。

ボタンが気に入ったのが、ピンいっぱい詰めて、活動中ずっと持っていました。

とにかくピンクが大好きで、ピンクを集めて集めました。最後に「何が楽しかった？」と聞くと「ピンク！」と元氣よくお返事。

### お気に入りの素材見つけた！

たくさん素材の中から、自分が気に入った素材を見つけ出します。素材を探究し、表現活動に入る人、気に入った素材をコレクションする人、ピンク色のものばかり集める人など、それぞれ自由に素材と対話します。

**現場の先生より** 遊び=形を残す、という完成させることだと思っていたが、気持ちや過程のほうが大切なことと実感しました。(レイモンド南町保育園)

### 初めての素材との出会いを見守る

素材との出会いを、大人が演出するのではなく、子どもが自らの発見する機会を奪わないように接します。

**現場の先生より** 保育者の声かけや見本、かわりかなくとも子ども自身が自ら粘土に興味を持ち、粘土に触れ、時には口に入れ確かめ、他の子が遊ぶ様子を見一人ひとりの姿を見ることができました。保育者が積極的にかわると、子どもが保育者の声ややっていることに興味を持ってしまおうということに気が付きました。たくさん集めてきましたが、その中でも、「表現の評価は意味がない」という講師の言葉が印象的でした。(N保育園)



大量の粘土との初めての出会いは、新たな発見の連続です。



0歳児クラスでのワーク。  
**現場の先生より** 0歳でどんなことができるのかと思いましたが、逆に0歳だからこそよかったです。



糸に通かしてセロファンを重ねる活動をする中で、たくさん重ねるとセロファンが膜になることを発見しました。

素材と素材を組み合わせて音を聴く、つくるワークショップ。どんな音が出るかな？

布を用いて活動しているうちに、「ドレスしよう！」と服を作って、ある人がモデルになり花嫁さんを作っていました。

### 「やりたい！」からそれぞれの表現へ

自分で好きなことを見つけた子どもは、大人の介入なしで自らの発見をさまざまな形で表現します。

**現場の先生のワーク記録より子どもの様子**

- ・ひょうたんを見て「これは人っている！」(飲み物入れるんじゃない?)
- ・蓮の素材を眺らして「赤プクーンが曇っている音」
- ・ざらざらした素材を「プロコリコリみたい」
- ・人を見つけて音があつたから自分が発見したことを共有する。
- ・蓮のにおいをかぐ「葉におい」
- ・目をつぶって聴診器で布の音を聴く
- ・「虹のいろのひもをつけた」(練馬区K保育園)

### まずは素材と仲良くなることから

粘土は包装した塊の状態を用意し、どのように遊ぶか等は一切園児には伝えず、園児自ら包装から取り出し探究し、仲良くなってもらいます。

**現場の先生より** 大人が語りかけなくても、子ども自身からの発信がものすごくあったです。いつもだいたい「ほら、見て、これは〇〇っていうんだよ」と教えてしまいましたが、それを「これは何だろう？」から始めていくと、子どもの思考力や感性が育まれると思えました。日々の保育からそれを取り入れていくことはできると思います。(高輪夢保育園)



子どもの言葉より  
「これ、何粘土?」  
「何何いっやの形」  
「おなかみたい」  
「いちご味の虫」  
「中に何があるの?」

粘土に触れる前に、ワークのために買ったビニールシートと仲良くなってもらいます。園児はシートを踏んだり、すわったり、「どろりコロコロ」と転がったりと、シートの上での感覚を楽しみました。

はじめは手が汚れることを嫌っていた人も、ただただ粘土に親しんで自由に活動しはじめます。



「ここにね、ワカメのあちやんがいるの!」貝の甲でイメージ育て。

様々なものを光に透過させ、どれが透けるのが、多様な方法で自ら探究します。

部屋を暗くしてライトテーブルに明かりをつけると、普段の見慣れた教室がいつも違う空間に変わります。

### 感じ、触れて、探究し、実践する

素材にじっくり向き合うことで、新しい発見を自ら導きます。

**現場の先生のワーク記録より子どもの様子**

- ・糸を様々なものにまいてどうなるか実験する。
- ・木や小さなかごをならべ、どーなるものを探し転がそうとする。
- ・ひょうたんの中にかかっているのを見つけ、ふる音かなるのに気がつき何個もふってみる。
- ・CDケースの穴を見て「クリームがここから出そう」
- ・はちの巣に似ている木の葉を見て布そうな表情をする。
- ・聴診器で友達や先生の音を聴く
- ・アルミシートの音を「はなびみたい音がする」と表現する。(K幼稚園)

### 多様な表現に触れる

**現場の先生より** 保育士がすべてを投げかけるのではなく、子どもたちが自身に興味を持ってやるような言葉掛けや粘土の遊び方をしているようにしたいと思いました。感覚、感触を刺激することを無理にやらうとせず、一人ひとり興味を持っていてることを引き出すように取り入れていきたいです。子どもたちがやるうとしていることをすべてダメと否定や禁止することや、やってみたくことを引き出し見守る姿勢をもっと取り入れ、チャンスを奪わないようにしていきたいと思えます。(D保育園)



子どもの様子より  
粘土に触れるうちに、「中からおもちゃがでてくる」と、塊をほじくり遊んでいるうちに広まりました。次は、取り出した粘土から形をつくる園児が出始め「クッキー」「おだんご」「ケーキ」「おだんご」など自分でつくったものことばが出るようになりました。また、ほじくりかきだされた塊の塊を「ありさんのおうち」や「おまわりさんの帽子」といって見立てて遊び始める園児もいました。

途中から参加した0歳児は、最初は緊張して先生のそばを離れず、最後は粘土の塊見がり感覚に粘土を手差しする行動を通じ、粘土とじっくり対話する瞬間をもちました。

最初はそっと触ってみたり、指で触れていました。その後、形を変えられる事を知り、指で押す、塊をたたき、ちぎる、ちぎって散らす、上から落とすようになりました。2歳のグループはそこから丸めたり、細長い棒状にしたり、ちぎった粘土から、クマや車、お団子などを形作るようになりました。

講師：3-4歳児担当 石井美代(イタリア幼児教育実践家) カラーメソッドコンファレンスとして養生室の特別講座講師、色彩心理学専攻心理学を学び、子どもの自由な創造性開発「カラー・エンジェル」主催を経て、2002年現在、レッジョ・エミリア市の共同性や教育観を4年間かけて滞在研究。レッジョ・エミリア教育アプローチに関する講座・講演を大学・自治体等で展開中。

講師：0-2歳児担当 中西 エリナ(伊のパートナー) 米国、日本両国で保育者として勤務。加州ではレッジョ感育実践校を勤務。日本の勤務先では「伊のパートナー」として子ども、保育者、保護者とともにある保育を追求。保育園におけるコミュニケーション・ビルディングや表現活動について研究。子どもを愛する。学ばせるのではなく「主体的な人間になるような人達、学ぶ環境を作るのが保育者の役割と考えている。教育に関わるいらいろを考える会「AMING INDIVIDUALS」主宰。